壁を越える　共生のキャンパスづくり実行委員会の活動

共生のキャンパスづくりシンポジウム

テーマ「学生、教職員、学生の人生を応援したい事業所等、みんなで考える大学の学生支援」
開催日：2021年12月22日（水）　15：15 ～ 17：30

▶話題提供①　「コロナ禍の学生生活～ショートムービー『理由』を作成した理由～」
卒業生の河合祐樹さんが作成された、ショートムービー『理由』の上映後、このムービーを作成しようと思った経緯や思いについて、お話いただきました。

▶話題提供②　「コロナ禍における自分の変化、そして大学に求める変化～学生それぞれの思いと学生が考えた学生支援ビジョン～」
学生3名（冷田陸歩さん、松本愛さん、太田雄斗さん）が、自身のリアルな経験と率直な思いを語り、その後、学生実行委員会から、「学生が考える学生支援ビジョン」（本紙2～3ページを参照）の報告がありました。

▶話題提供③　「コロナ禍の学生支援～百縁夕食の取組～」
本学総務部の野村さんより、コロナ禍の学生支援の取組として実施した百縁夕食の報告や親和会（保護会）による学生応援企画の実施について報告がありました。

▶話題提供④　「大学生協の学生支援～コロナ禍の取組とこれから求められる学生支援～」
龍谷大学生活協同組合の谷口専務理事より、大学生協で実施した学生アンケートの結果や、コロナ禍での学生支援の取組について具体的にご紹介いただきました。

※詳細は、上記QRコードより、ReTACTION『コロナ禍の困難に直面している学生たちの声から、学生、教職員、学生の人生を応援したい事業所等、みんなの協働によるこれからの学生支援について考える「第4回共生のキャンパスづくりシンポジウム」レポート』をご覧ください。

↑「学生が考える学生支援ビジョン」報告の様子

↑実行委員会メンバー
上段左から、河合 祐樹（かわい ゆうき）さん、髙田 里咲（たかだ りさ）さん、冷田 陸歩（ひえだ りくほ）さん、太田 雄斗（おおた ゆうと）さん、谷口 未久里（たにぐち みくり）さん
下段左から、西田 麻穂（にしだ まほ）さん、松本 愛（まつもと あい）さん

花プロ　新入生を花いっぱいのキャンパスで迎えたい!! プロジェクト

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により出会いや交流の機会が減少し、多くの学生が友達づくりに大変苦労してきたことから、実行委員会では、「友達に出会えない」「繋がりを作れない」状況にあることを重大な社会課題と捉え、一人でも多くの学生が出会い繋がる場の創出をすることと、自分たち自身も繋がりながら元気に新年度を迎えることを目標に、企画実施しました。

↑新入生に向けて歓迎メッセージ

↑ペンキ塗りの様子

▶第1回　2022年3月18日（金）　13：30 ～ 15：00
プロジェクト概要説明。自己紹介。各役割の決定。花の苗を入れる鉢箱に1回目のペンキ塗りを行いました。「自分はコロナで入学式が無かったから、新入生のために何かできるといいなと思い参加した」「友達をつくりたくて参加した」という学生が多く、作業中も話が弾んでいました。

▶第2回　2022年3月24日（木）　13：00 ～ 15：00
コロナ禍の大学生の実態について、学生アンケートの結果などを基にミニ学習会を行いました。その後、メッセージボードに載せる新入生に伝えたい全体メッセージについて意見交換を行いました。「コロナ禍だからこそ繋がろう」「一人じゃないよ」等様々な意見が出され、最終的に「なんとかなるよ～」に決定。慣れないオンライン授業、友達をつくれない淋しさや孤独など困難な経験をしたものの「なんとかなっているな」という、少し成長した学生たちの実感のこもった言葉を新入生に伝えることになりました。2回目の鉢箱のペンキ塗りも行いました。

▶第3回　2022年3月31日（木）　13：30 ～ 16：00
メッセージボード担当者のリーダーシップのもと、ボードを作成しました。ボードを彩る草花や鳥、ボードを取り囲む紙の花を作る作業はとても楽しく、和やかな雰囲気で話が弾んでいました。実行委員一人ひとりからの新入生へのメッセージを、ボードに張りつけて完成！

▶第4回　2022年4月1日（金）　8：30 ～ 9：30
入学式当日。強風の中、キャリアセンター前にメッセージボードを立て、ペンキを塗った鉢箱に教職員の皆様から頂いた花の苗を入れて、メッセージボード周辺に飾りました。「良いのができた!」と晴れやかな顔。「これで終わるのは残念」「また集まりたい」等別れを惜しむ声が多く出され、後日反省会を実施する運びとなりました。

わたしたち、こんな活動をしています！

〈Ryu-SEI GAP“RYUHUKu”〉

私たち、RYUHUKuは、金銭面や心理面など様々な理由で、「服に困る」を解決することを目指しています。まだ、着ることができるけれど、いらなくなった服を、その服を欲しいと思う人へつなぐことで、「服に困る」ということの解決につなげ、大学生活をより楽しく過ごしてほしいという思いで、活動しています。
そのために、龍谷大学内で、着ることができるけど、いらなくなった服を回収させていただき、その服を無料フリマを開催して渡しています。

RYU_HUK

左から
松本 史門（まつもと しもん）さん、
髙田 里咲（たかだ りさ）さん、
坂本 有紀奈（さかもと ゆきな）さん、
西田 麻穂（にしだ まほ）さん

〈Ryu-SEI GAP“Clear”〉

LGBTQなどの多様な性を持つ学生が生活しやすい学校環境を作りたいという思いをもって活動しています。身近に欠かせないトイレに着目し、龍谷大学のダイバーシティを実現するためのトイレに関する提言書を入澤学長に提出しました。
共生のキャンパスづくりシンポジウムでは、龍谷大学におけるセクシュアルマイノリティの自認状況や深草キャンパスのトイレ調査から分かった龍谷大学のトイレの課題などを報告し、全ての人が使いやすいトイレ環境の整備が必要であると発表しました。

左から
柏木 文乃（かしわぎ あやの）さん
長崎 まなみ（ながさき まなみ）さん
辻口 美桜（つじぐち みお）さん
牧村 美優（まきむら みゆ）さん

〈龍谷大学一般同好会手話サークル LEMON〉

週に2回学習会を開催して手話の学習や実践を行っています。また龍谷祭などのイベントにも参加をし、より多くの人に手話について知ってもらうための活動にも取り組んでいます。共生のキャンパスづくりシンポジウムでは、入澤学長など参加者の方々のお名前の手話での表し方などを伝えさせていただきました。コロナ禍で思い通りの活動が行いにくい昨今ではありますが、オンライン開催等の工夫をし、今後も手話の学習と普及に努めていきます。

編集後記

本紙面の編集にあたり、学生編集委員は、コロナ禍の危機を乗り越えた経験などから、「自身や他者との壁を越えるためにどんなことが必要なのか」を必死に考えていました。そんな学生の姿を見ながら感じたことは、学生たち1人1人がさまざまな壁を越え、人間的に成長していく過程を応援するためにできることは何なのか、私たち大人も、学生とともに考える必要があるのではないかということです。「共生のキャンパスづくり」は多様な学生の歩みに伴走しながらこれからも続いていきます。

VarIproD. at ryukoku University
（ヴァリプロード）2022年11月発行　発行：龍谷大学障がい学生支援室（学生編集委員：橋本陸路、髙田里咲）
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67　電話 075-645-5685　http://www.ryukoku.ac.jp/support/

VarIproD. at ryukoku University

ヴァリプロード　Vol.3
〈学生発　共生のキャンパスづくりを考える情報誌〉

大学生といえば、みんなで賑やかに遊ぶイメージがあるかもしれません。
しかし、全ての大学生がそんな華やかな毎日を過ごしているのでしょうか。
そのまぶしさにかき消されている、抑圧された痛みや苦しみがきっとあるはず。
一人では苦しいことも、誰かと力を合わせれば乗り越えられるかも。
でも、「誰か」とつながるには、どうすればいいんだろう。

法学部　橋本 陸路（はしもと りくろう）

本誌『VarIproD.（ヴァリプロード）』は、ラテン語で「多様性」を意味する“varietas”と「声明する」を意味する“prodere”からなる造語で、大文字部分を繋ぐと「見よ」を意味する“vid.”となる。　デザインは、山﨑幸愛さん（文学部）。

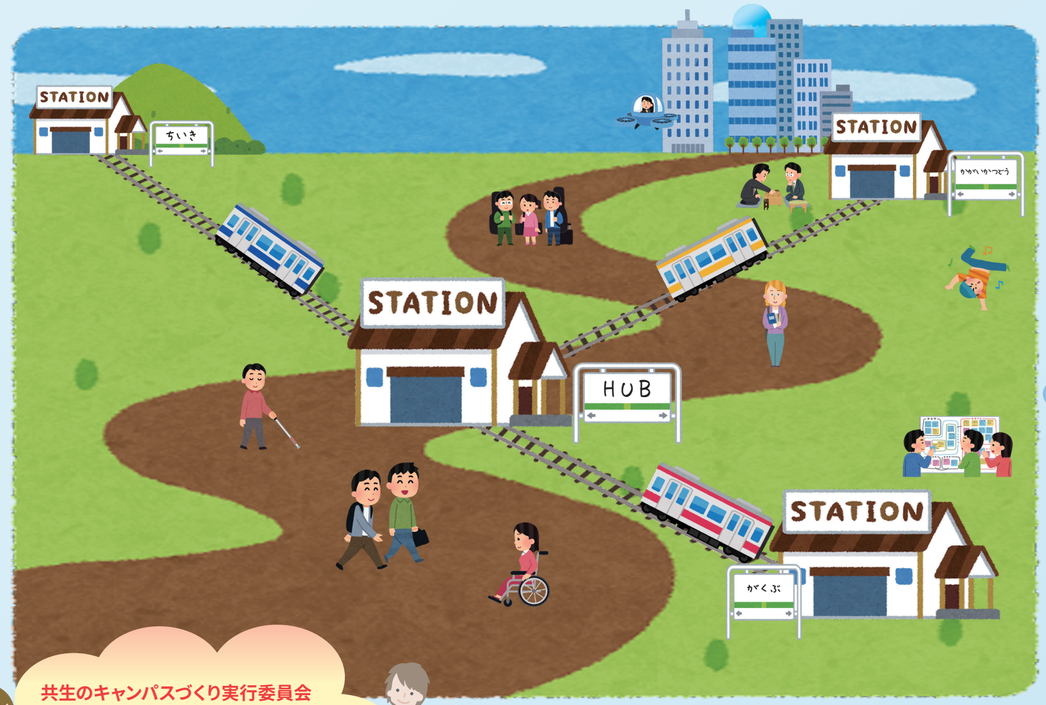
壁を越える
学生の多様な歩みを応援できる大学づくり
人と人、学びと経験が交錯する Hub Station

もっと楽しく

もっと
リラックスできる

学生の思い発！

2021年12月22日に開催された、第4回 共生のキャンパスづくりシンポジウムのテーマは、「学生、教職員、学生の人生を応援したい事業所等、みんなで考える大学の学生支援」。（詳細は4ページをご覧ください）
その中で、学生実行委員代表から、「学生が考える学生支援のビジョン」が発表されました。このビジョンは、コロナ禍の影響を受けた学生たちが、自分たちの経験や気持ちを出し合いながら作成したもので、コロナ禍の教訓を活かし学生支援体制の再構築を提案するものです。
ビジョンは、「①学生の出会いや学び、主体的な活動を応援してくれる学生支援機能」「②安心して誰かと話せる居場所機能」「③障がいがある/ないに関わらず、困りごとがはっきりしなくても一緒に考えてくれる相談機能」の3つの重点目標を上げています。そして、大学全体でそれらの機能が上手く働き、大学構成員全体の力が発揮されるように、ワンストップではなく、関係部署や地域との協働を推進する「HUB(ハブ)」となる人や場が重要であるとしています。
人と人、組織と組織を結び、学生の多様な学びと経験を応援する場を「Hub Station」と名付けました。



学生の学びや活動を応援

●学生の主体的・意欲的な活動を応援
ゼミなどで夜通し議論できる（宿泊できる）場所や、社会課題の解決に向けた主体的な取組やサークル活動など学生の意欲的な活動を積極的に応援してくれる体制を創って欲しい。

●楽しいイベント
学生同士が出会い親睦を深められる楽しいイベントがあると嬉しい。季節の行事などがあると、繋がるきっかけになるかもしれない。

共生のキャンパスづくり実行委員会
・共生のキャンパスづくりシンポジウム
・新入生を花いっぱいで迎えたい！プロジェクト
・写真でつながるプロジェクト
※詳細は下部と4ページをご覧ください！

居　場　所

●誰かと話せる
初めて行くときは初対面で緊張するけど、だんだん顔見知りになって、「あそこに行けばあの人たちと話せる」と思えるようになり、大切な居場所になっていくと思う。
学生の話にとりあえず寄り添ってくれる大人や、話しやすい雰囲気を作ってくれる学生スタッフがいる、「安心感のある場所」であってほしい。

●学生の思いに寄り添い、繋いでくれる
日常的に学生が持っている様々な思いを聴き、アドバイスをしてくれたり、適切な相談先を紹介してくれる等、学生と、学内の部署や学外機関の橋渡しをしてくれる場所であってほしい。

相　談

●はっきりした困りごとでなくても生活面の困りごとも相談できる
ちょっとした困りごとだったものが、人に話せなかったことによってだんだん深刻化していくこともあるため、ちょっとした困りごとが、雑談レベルで気軽に相談できる場所であってほしい。
障がいがある/ないに関わらず誰でも相談できる場、生活面も含めて具体的に困りごとの解決にむけて寄り添いながら伴走してくれる場であってほしい。

サークル化決定！

フォトプロ
写真でつながるプロジェクト

フォトプロは、参加者同士が交流しながら、カメラの選び方や写真の撮り方を楽しみながら学ぶイベントです。「新入生を花いっぱいのキャンパスで迎えたい！！プロジェクト」（花プロ）に参加したメンバーの中で、写真に興味のある学生が中心となり、花プロと同様、「友達に出会えない」「繋がりを作れない」状況にあるという社会課題の解決に向け、一人でも多くの学生が出会い繋がる場の創出を目的として、企画実施しました。

▶第1回　2022年8月8日(月)　13：30 ～ 15：00
ランダムに分けられたグループごとに和やかな雰囲気で自己紹介、アイスブレイクをした後、実行委員のメンバーが講師となり、講座が行われました。
カメラの種類とそれぞれの特徴、写真の撮り方（構図、光源、アングル等）など盛りだくさんの内容で、とても為になる講座でした。講座の後は実践！ということで、実際に観葉植物の撮影もしました。

↑講座の様子

↑講座の内容を意識しながら撮影

▶第2回　2022年8月9日(火)　13：30 ～ 15：00
前日の講座の内容を軽く復習した後、グループに分かれて撮影会をしました。場所は、深草キャンパスとその周辺。伏見稲荷大社まで歩いて行った班もありました。写真に詳しい学生が、初心者の学生にテクニックを伝授していたり、それぞれが撮った写真を見せ合ったり、とても温かく楽しい雰囲気の中、活動することができました。
撮影会の後は、自由参加で、それぞれの学生が撮った写真をプロジェクターで映しながら講評会も行いました。
参加者アンケートでは、「写真を楽しめるようになった」「いろいろな学部、学年の繋がりができてよかった」等多くの声が出されました。

↑撮影会の様子①

↑撮影会の様子②

コロナ禍における大学生のつながり

▶大学という場所
大学は、高校までとは比べ物にならないほどたくさんの人が集まります。
具体的に言うと、高校は数百人規模であるのに対し、大学は数千～数万人規模。
しかし、たくさんの人はいても、各々の心理的な距離はとても遠くなるのではないでしょうか。高校までのクラス単位行動はなくなるから、高校までのように自然に仲良くなっていたということは、大学になると大きく減る、もしくは一人も仲良くなれないかもしれません。
そういう現実があるにもかかわらず、大学では人とのつながりが必要になるときがたくさんあるのではないでしょうか。
具体的には、履修登録のとき楽な授業を教えてもらう、試験前に過去問をもらうなど。
2020年の私は、こういう氾濫する情報に揉まれ、人と繋がれなければ終わりだと不安に思いながら大学入学を待っていました。

▶つながりが断たれる
そんなとき、新型コロナウイルスが本格的に流行し、私たちはあまりに予想外な形で分断を余儀なくされました。部活・サークルは禁止、授業はオンライン。
友達も、授業や履修のわからないことを相談する相手もなかなかつくれませんでした。
最近では規制が緩和され、本来の大学生活がある程度戻りました。
ようやく友達ができて、楽しい大学生活を送っている人もいらっしゃるかもしれません。
しかし、規制の影響でつながりを作るきっかけに乗り遅れ、友達がいない、属するコミュニティがないなどで困っている方もいらっしゃるのではないでしょうか。
私自身も、友達や属するコミュニティがない人のうちの一人でした。
周りの人たちはみんな楽しそうなのに、自分だけ置いてきぼりにされている。一生に一度しかない大学生活は何もできずに終わってしまうのか。
やり場のない孤独感に、私はとても苦しめられていました。
今年の4月、私は運よく友達ができました。でも、それは本当に運がよかったからで、友達ができないままだった可能性も決して少なくなかったと思っています。
そして、いま孤独な人たちの存在が忘れられようとしている、とも考えています。
規制が弱まり、みんながつながれて当たり前になった反面、つながれていない人たちが目立ちにくくなっている。
つながりやすくなった今こそ、個々人の自由に任せるのではなく、つながれていない人につながりを作るきっかけになるような、イベントやサークル活動などにアクセスする機会を設けるべきではないでしょうか。

法学部
橋本 陸路（はしもと りくろう）